

愛国百人一首を読む



期間：平成 26 年 1 月 5 日(日)～3 月 27 日(木)

解題

古代から近世までの和歌から「愛国歌」百歌を選んで、日本文学報国会は昭和17年11月、愛国百人一首を発表した。これは、川田順が「私選にあらざして『公選』のものとする(『愛国百人一首評釈』)のように、内閣直属の情報局が認定し、後援には陸軍省・海軍省・文部省・日本放送協会・大政翼賛会が名を連ねている。太平洋戦争下、国民の戦意高揚を意図してのものであることは言うまでもない。具体的に選定にあたったのは、日本文学報国会の短歌部門で、選者として佐佐木信綱、土屋文明、釈道空(折口信夫)、斎藤茂吉、太田水穂、尾上柴舟、窪田空穂、吉植庄亮、川田順、齋藤瀏、松村英一、北原白秋(選定期間中に死去)の12人が名を連ねていた。もちろん、選定時とは価値観が一変した戦後も活躍を続けた選者の場合は特に、愛国百人一首の選定に関わったことは、微妙な経歴とはなかった。しかし、当時としては、歌人として文学研究者として、推しも推されぬ第一人者ばかりである。

解説書の類では、おおむね選者自身が明らかにした選定基準が示されており、川田著によれば次のとおりである。

- 1.形式的には短歌であり、小倉百人一首に採録されているものは除く。
- 2.時期的には、万葉集以降で、明治維新前に没した詠者に限定する。
- 3.臣下の歌に限定、つまり天皇や皇族の歌を除くこと。
これらが必要条件で、3については、直接照会して宮内省の意向に従ったとしている。
- 4.「愛国」を広義に解釈する(例えば、母性愛や夫婦愛をうたった女性の歌、国土の美しさをうたったものなど)
- 5.ある作者の歌の中から一種を選ぶ場合は、直接愛国の精神を詠っているかよりは、和歌として優れているかを基準とする。
- 6.明朗に、また積極性を帯びている作をなるべく優先する。
- 7.歴史上有名な人物の作であっても、あくまで作品としての質で選定する。

こうして公表された選定基準とは別に、選者の間では共通認識となっていた選定方法があったという。今川仁視「『愛国百人一首』における選歌と編集の方針について」(『東海近代史研究』19号、1997)は、斎藤茂吉による選評(全集だと14巻703頁-)などをもとに、新古今和歌集と同様、「語句の連鎖」によって、歌を選んでいったのではないかと推測する。つまり、Aの歌と共通する(又は同じ意味を持つ)語を詠みこんだ歌Bを選び、次にBの歌の中で別の語を共通する歌Cを選ぶといった方法を取り、一つ一つの歌はもちろん、この語句の連鎖(例えば春→神→君→富士→天→雪→春で「神国」といった)「愛国」を具体化する小テーマを表現しているというのである。今川は、この方法

により、時代順に並べられた歌の順を、テーマごとに復元して示している(本図録では12頁にその一部を示した)。

この時代順再編成によって、愛国百人一首のテーマ性は見えにくくなった一方で、詠者の時代性は見えやすくなった。川田順は前掲書で、万葉集関係の詠者として23人、江戸時代の詠者として過半の51人と数えている。とりわけ、江戸時代でも、国学者や尊皇派の志士を中心に、幕末に生きた詠者が30人近くを占めているのも一目瞭然であり、天誅組関係者のものも、表紙のように松本奎堂・吉村寅太郎・伴林光平・渋谷伊与作の4首が収められている。作品としての質を優先するとしつつも、南北朝期の作は南朝側の人物に限って採録し、尊皇派の志士の歌を積極的に採録したのは、一定程度歴史性が反映されているといつてよい。なお、選定には辻潤之介、平泉澄、井野辺茂雄といった歴史家も協力している。

発表された時代順配列は、考証をもとに詠者の厳密な死亡年順にもとづくものに改定がなされた(関西連合教育会『通釈愛国百人一首』)が、一般には当初発表された順のものが流布している。

選者らの共著である『定本愛国百人一首解説』は、「和歌を通して指導精神を示さうとして、古来の愛国歌を選定したもの」で「かるたの資料としてのものではない」とする。しかし、「一度び、選定した以上、それが一般に流布し、浸透し、精神的感化の大いならんことを望んでいる」ため、かるた化されることは望ましいとしていた。そして実際に、どれだけ遊ばれたかは別にして、多数のかるたが発売されており、今回紹介するのもその一例に過ぎない。

小倉百人一首以外のいわゆる異種百人一首では、これだけかるたが作られたものもまれであり、加えて発表されたのが昭和17年11月と、昭和20年の終戦まで発売される時期が3年弱しかなかったことを考えれば、異例の普及を遂げたといえる。

ある一定の時代状況の中で、時の政策課題に沿う形であれば歌群を「戦争利用」した行為、ましてや利用された歌群自体を、どう評価するかは難しい問題である。万葉集から採録された歌は、愛国百人一首に選ばれなくとも、評価され続ける歌である。しかし、特に川田の尽力により採りあげられた、従来あまり知られていなかった幕末の詠者の歌についてはどうか。愛国百人一首に入って、一時的にはスポットが当たった一方で、かえって戦後は、文学史に取り上げられることを忌避された場合もあろう。戦争と短歌、のみならずひいては文学や芸術との問題を考えるうえで、恰好の素材を提供しているといえる。

柿本人麿 かきのもとのいとまろ
 白雪は神 おほまきはかみ
 まよせハ まよせハ
 天雲の あまぐも
 いかつちれ上よ いかつちれ上よ
 廬 いほ せしめ かみ



長奥麻呂 ながおくまろ
 大宮の内まで おほみやの内まで
 廊下 ろうげ
 網引すと あみひきすと
 網子ととのふる あみことのふる
 海人の呼び聲 あまのよびこゑ



大伴旅人 おほともたけ
 やすみしわが やすみしわが 大 手 の 食 園 は
 大和も此處も同じとぞ念ふ やまともこのこゝもおなじとぞおもふ



高橋虫麻呂 たかはしむしまろ
 千万の軍 ちやうまんぐん
 なりとも なりとも
 言撃せず ことげきせず
 取りて来ぬべき とりてきぬべき
 男とぞ念ふ おととぞおもふ



山上憶良 やまのうえのおよむ
 士やも空しかるべき万代に あゝともしかるべきまごよに
 語り継ぐべき名は空てすして かたりつぐべきなはあてすして



笠金村 かさかねむら
 ますらもの ますらもの
 弓上 ゆみかみ
 心起し こころおこし
 射つる矢を やはずるやを
 後見む人は のちみむ人は
 語り継ぐがね かたりつぐがね



山邊赤人 やまべのあかひと
 あしひきの山にも あしひきのやまにも
 野にも御獵人 のにもみかりびと
 得物矢 えものや
 手挟み たはさみ
 散動りたり見ゆ みだりたりみゆ



旅人の あそび
 宿りせむ野に やどりせむの
 霜降らば しもふらば
 吾が子羽 われがこは
 天の あま
 鶴群 つるぐら
 遣唐使使人 けんたうししじん



安部女郎 あべのいらつら
 わが脊子は わがせなは
 物な思ほし ものなおもほし
 ことし ことし
 あらば あらば
 火にも水にも吾なけなくに ひにもみづにもわれなけなくに









源経信
君が代はつきしと思ふ神かせや
みもすそ川のすまん限は



源俊頼
君が代は松の上葉におく露の
つもりて四方の海とならまで



藤原範兼
君が代にあるは
誰れも嬉しきを
花は色にもいに
けるかな



源頼政
みやま木
その梢とも
見えざりし
櫻は花に
あらはれにけり



西行
宮柱したつ
岩根に
しきたてて
つゆも曇らぬ
日の御影かな



藤原俊成
君が代は千代ともさざじ天の戸や
づる月日のかまりなれば



藤原良経
昔たれかかる櫻の
花を植えて
吉野を春の
山となしけむ



源實朝
山はさへ海は
あせなむ世なり
君にふた心
わがあらめやも



藤原定家
曇りなきみどりの空を
君が八千代を
まつ祈るかな

宏覚禪師
 末の世の末の末迄
 わが國は
 よろづの國に
 すぐれたる國

中臣袖春
 西の海よもくる波も心せよ
 神の守れるやまと島根ぞ

(藤原爲氏)
 勅として祈る
 するしの神風に
 寄せくる波に
 かつ砕けつ

命をば軽きに
 なして
 武士の
 道あり
 おもき
 道あり
 めやは

源致雄

藤原爲定
 限りなき恵を四方にしき島の
 大和島根は今さかゆなり

藤原師賢
 思ひかね
 へりにし山を 立ち出で、
 迷ふ浮世もたゞ君の爲

津守國貴
 君をいのるみちに
 いそげば神垣に
 はや時つけて
 鶏も鳴くなり

菊池武時
 凡ののふの上矢の
 かぶら一筋に
 思ふ心は神
 知るらむ

楠木正行
 かへら
 かねて思へば梓弓
 なき數にいる名をぞとむる

北島親房
 鶏の音になほぞ
 おどろく
 つかふとて
 心のたゆむ
 ひまは
 なけれど

森迫親正
 いのちより名こそ惜しけれもののふの
 道にかふへき道しなれば

藤原実隆
 あふぎ来て
 もろこし人も
 住みつくや
 けに日の本の
 光なるらむ

新納忠元
 あちぎ
 なや
 もろこしまでも
 おくれじと
 思ひしことは昔なりけり

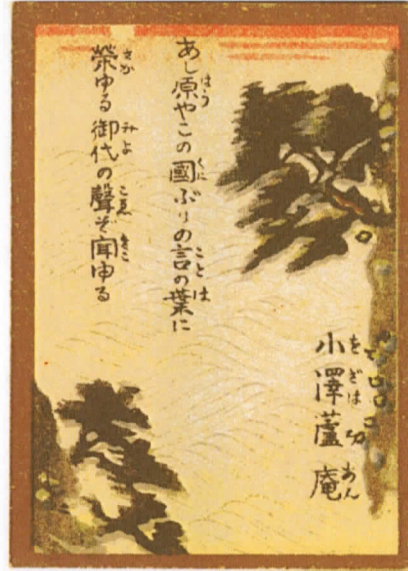
下河辺長流
 富士の嶺に登りて見れば
 天地はまだいくほども
 わかれざりけり

徳川光圀
 行く川の清き流れに
 おのづから心の水も
 かよひてぞすむ

荷田東満
 ふみわけよ
 大和には
 あらぬ
 唐鳥の跡を
 みるのみ人の道かは

賀茂真淵
 大御田のみなわも
 泥もかき
 たれて
 とるや早苗は
 我が君の爲


田安宗武
 もののふの
 魄にたつる
 鉞形の
 ながめがしは
 見れど
 あかすけり



がまふくんべい
 蒲生君平
 とはわが
 遠つ祖の
 身によつたる
 緋絨の
 面影浮ぶ
 木々のもみち葉



くひたひまろ
 栗田主満
 かけまくもあやに畏ま
 すめらぎの
 神のみ民とあるが
 ためしさ



かはやまかみ
 大日本神代ゆ
 かけてつたつる
 賀茂季鷹
 雄々しき道ぞ
 たゆみあらすな



あさひはくしほはへやそた
 青海原朝の八重の半園
 ひらたあつたぬ
 平田篤胤
 つきてひめよこの
 正道ぞ



かほかけまき
 香川景樹
 ひとかたに
 花すすき風吹く時ぞ
 みだれざりける



おほくらわき
 大倉登夫
 やすみしわが大君のしきませる
 御國ゆたかに春は來にけり



ふじたどうし
 藤田東湖
 かきくらす
 アメ
 人に
 天つ日の
 カバヤク
 國の
 てぶり見せばや



あじろひらのり
 足代弘訓
 わが國はいともたふとし
 ああぞかみまらり
 天地の神の祭を
 まつりごとにて



かほらら
 加納諸平
 君がため花と散りにし
 ますらきに
 見せばやと思ふ
 御代の春かな



大君の宮敷き
ましし 檣原の
(鹿持稚澄)
うねびの山の
古おもはゆ

月照
大君のためには
何か惜し
からむ
薩摩のせとに
身は沈む
とも

石川依平
大君の御執事のみけと
魚すらも
神代よりこそ
つかへぎにけれ

梅田雲浜
君が代を思ふ心のひとすぢに
吾が身ありともおもはざりけり

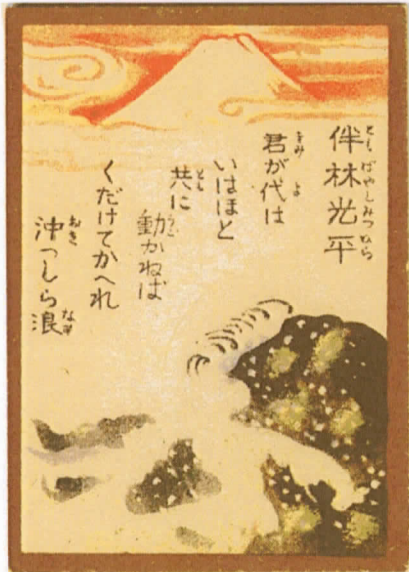
吉田松陰
身はたとひ
武蔵の野辺に
朽ちぬとも
とめおかし
大和魂

有村治左衛門
岩が根も砕かさうめや
ものふの
國の
鳥にと
思ひ切る
太刀

高橋多郎
鹿島なる経の
み霊の
み剣を
こころに
磨きて
行くはこの旅

佐久良東雄
天皇に仕へまつれと
我を生みし
我がたら
ちねぞ
たふとかりける

徳川齊昭
あまさかる
えぞをわが
住む家
とて
ならぶ千島の
まもりともがな





歌の頭部の第一段目の数字は、『定本・愛国百人一首解説』の配列順を示し、二段目の数字は選歌の完了時点での配列順を示す。
 なお、歌本文のうち、ひら仮名の部分は原文通りとし、歌本文の漢字の部分と詠歌者名は原則として常用漢字に直した。

1、神國

- 橘 曙覽
 100 1春に|あけてまづみる書も天地のはじめの時と読み出づるかな
 荒木田 久老
 61 2初春の初日かがよふ神國の神のみかけをあふげ諸
 掛取 魚彦
 55 3すめ神の天降りましける日向なる高千穂の嶽やまづ霞むらむ
 柿本 人麿
 1 4大君は神にしませば天雲の雷の上にいほりせるかも
 藤原 俊成
 33 5君が代は千代ともささじ天の戸や出づる月日のかぎりなければ
 下河辺 長流
 50 6富士の嶺に登りて見れば天地はまだいくほどもわかれざりけり
 橘 枝直
 56 7天の原てる日にちかき富士の嶺に今も神代の雪は残れり
 紀 清人
 14 8天の下すでに覆ひて降る雪の光見れば貴くもあるか



葛井 諸会
 15 9新しき年のはじめに豊の年しるすとならし雪のふれるは
 大倉 鷺夫

2、豊葦原瑞穂の國

- 大伴 旅人
 69 10安見ししわが大君のしきませる御國ゆたかに春は来にけり
 3 11やすみししわが大王の食國は大和も此処も同じとぞ念ふ
 上田 秋成
 63 12香具山の尾上に立ちて見渡せば大和國原早苗とるなり
 加茂 真淵
 53 13大御田の水泡も泥もかきたれてとるや早苗は我が君の為
 橘 千蔭
 62 14八束穂の瑞穂の上に千五百秋國の秀見せて照れる月かも
 大中臣 輔親
 26 15山のごと坂田の稲を抜き積みて君が千歳の初穂にぞ春く
 山部 赤人
 7 16あしひきの山にも野にもみ獵人さつ矢手挟みみだりたり見ゆ
 大伴 家持
 17 17すめろぎの御代栄えむと東なるみちのく山にくがね花咲く
 鹿持 雅澄
 73 18大君の宮敷きまししかし原のうねびの山の古おもほゆ
 西行 法師
 32 19宮柱したつ岩根にしき立ててつゆも曇らぬ日の御影かな
 長 奥麻呂
 2 20大宮の内まで聞ゆ網引すと網子ととのふる海人の呼び声

展示図書リスト

1.解説本

請求記号	書名	著者	発行者	発行年月	所在
911.1-0000	愛国百人一首	牧野靖史著	国進社出版部	1942	書庫1
911.1-0000	愛国百人一首通釋	坂口利夫著	五車書房	1943.1	戦争体験文庫
728.1-11	書道愛国百人一首	内山雨海著	大新社	1943.2	書庫1
911.1-0000	愛国百人一首略解	長馬圭之編	文章社	1943.3	書庫1
911.167-13-T	愛国百人一首評釋	川田順著	朝日新聞社	1943.5	書庫1
911.1-2	愛国精神と和歌	武田祐吉述	啓明會事務所/北 隆館(発売)	1943.9	書庫1
911.167-73	愛国百人一首物語	松村英一著	天佑書房	1943.11	書庫1
154-3239	大東亜戦争と小國民の常識		華陽堂書店	1943.12	戦争体験文庫
911.1-0000	定本愛国百人一首解説	日本文學報國 會編纂	毎日新聞社	1943	戦争体験文庫
911.167-72	One hundred patriotic poems : "aikoku hyakunin isshu"	Heihachiro Honda訳	The Hokuseido Press	1944	書庫1
911.104-カワタ	愛国百人一首	川田順著	河出書房新社	2005.5	書庫1

2.選者の歌論など

請求記号	書名	著者	発行者	発行年月	所在
911.1-88	戦國時代和歌集 普及版	川田順著	甲鳥書林	1944.4	書庫1
911.1-328	定本吉野朝の悲歌	川田順著	養徳社	1945.10	書庫1
911.5-14	歴史と詩歌	川田順著	全国書房	1942	書庫1
911.15-9	幕末愛国歌	川田順著	第一書房	1939.6	書庫1
914.6-ヨ-6	百姓記	吉植庄亮著	講談社	1946	書庫1
610.4-14	雨耕抄：農村隨筆	吉植庄亮著	時代社	1944	書庫1
914.6-201	馬の散歩	吉植庄亮著	羽田書店	1939.9	書庫1
911.15-15	徳川時代和歌の研究	窪田空穂,松村 英一編	立命館出版部	1932.11	書庫1
911.1-109	明日の短歌	窪田空穂著	竜行社	1948.7	書庫1
911.12-66	萬葉集の批評と鑑賞	窪田空穂著	岩波書店	1948.5	書庫1
918.6-88-7	窪田空穂全集 第7巻	窪田空穂著	角川書店	1965-	書庫1
918.6-88-8	窪田空穂全集 第8巻	窪田空穂著	角川書店	1965-	書庫1
911.107-2	短歌の作法と鑑賞	松村英一著	人文書院	1938.1	書庫1
911.104-47	短歌管見	松村英一著	人文書院	1936.7	書庫1
911.12-152	万葉漫筆	佐佐木信綱著	改造社	1927	書庫1
911.12-55	萬葉清話	佐佐木信綱著	靖文社	1942.5	書庫1
911.12-83-T	萬葉五十年	佐佐木信綱著	八雲書店	1944.6	書庫1
911.15-6-T	近世和歌史	佐々木信綱著	博文館	1923.1	書庫1
911.162-19	ある老歌人の思ひ出：自伝と交友の 面影	佐佐木信綱著	朝日新聞社	1953.10	書庫1
910.23-31-1T	上代文學史 上巻(日本文學全史:巻1)	佐佐木信綱著	東京堂	1935	書庫1
910.23-31-2T	上代文學史 下巻(日本文學全史:巻2)	佐佐木信綱著	東京堂	1936	書庫1
911.126-17	新修萬葉紀行	土屋文明著	創元社	1952	書庫1
911.124-ツチャ	万葉名歌	土屋文明著/桜 井信夫編	アートデイズ	2001.12	書庫1
911.107-10	短歌入門	土屋文明著	古今書院	1937	書庫1
918.6-クンマ	土屋文明(群馬文学全集:第2巻)	小市巳世司編	群馬県立土屋文 明記念文学館	1999.1	書庫1
911.162-ツチャ	土屋文明戦時下の思い：第63回企画 展	群馬県立土屋 文明記念文学 館編	群馬県立土屋文 明記念文学館	2008.12	書庫1
911.108-33-T	太田水穂篇(現代歌論歌話叢書)	太田水穂著	改造社	1935.6	書庫1
911.15-21	近世歌人評傳	齋藤茂吉[著]	要書房	1949.9	書庫1
918.6-208-14	齋藤茂吉全集 第14巻	齋藤茂吉著	岩波書店	1973-1976	書庫1

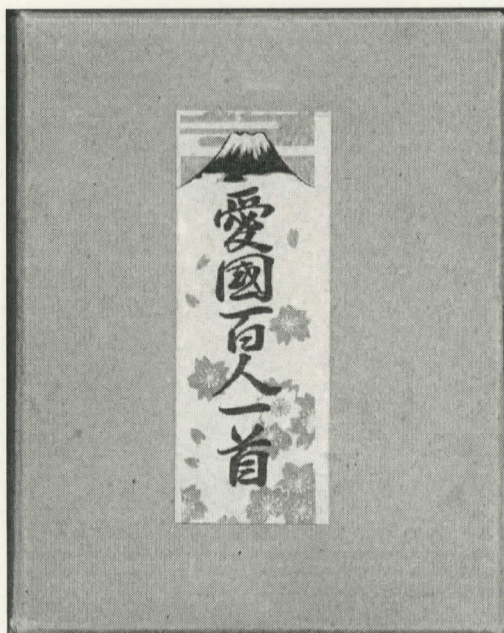
911.104-25-T	近代短歌(日本文学大系:第14巻)	折口信夫著	河出書房	1940	書庫1
910.28-888	折口信夫事典 増補版	西村亨編	大修館書店	1998.6	書庫1
911.5-9	藝術の圓光:詩論集(白秋文庫)	北原白秋著	アルス	1938.2	書庫1
911.13-1	六歌仙・古今選者讀本(鑑賞短歌大系:8)	北原白秋, 折口信夫編	學藝社	1937.7	書庫1
728-155	平安朝時代の草假名の研究	尾上八郎著	雄山閣	1926.9	書庫1
910.2-5	日本文學新史	尾上八郎著	東亞堂書房	1914.11	書庫1
904-141-T	惡童記	齋藤瀏著	三省堂	1940.6	書庫1
914.6-759	獄中の記	齋藤瀏著	東京堂	1940.12	書庫1

3. 日本文学報国会の刊行物

請求記号	書名	著者	発行者	発行年月	所在
281-2200	日本の母	日本文学報国会編	春陽堂書店	1943.4	戦争体験文庫
159.8-30-T	定本國民座右銘	日本文学報国会編纂	朝日新聞社	1944.5	書庫1
210.08-35	古事記・祝詞・宣命(國民古典全書:第1巻)	日本文学報国会編纂	朝日新聞社	1945.1	書庫1
910.4-15	國文學叢話	日本文学報国会編	青磁社	1944.11	書庫1
911.307-9	俳句のすゝめ	日本文学報国会編	三省堂	1944.6	書庫1
919.6-16	大東亜戦詩	日本文学報国会編	龍吟社	1944.10	書庫1
910.35-1	會員名簿:昭和十八年度	日本文学報国会 [編]	新評論	1992.5	書庫1

4. 文学史的位置づけ

請求記号	書名	著者	発行者	発行年月	所在
911.16-コイケ	昭和短歌の再検討	小池光 [ほか] 著	砂子屋書房	2001.7	書庫1
911.16-118	昭和短歌史	木俣修著	明治書院	1964.10	書庫1
911.16-サエク	昭和短歌の精神史	三枝昂之編著	本阿弥書店	2005.7	一般資料
911.16-ウチノ	現代短歌と天皇制	内野光子著	風媒社	2001.2	一般資料



表紙及び本文

三島白水社版愛国百人一首かるた読み札。
本展示で使用したかるたすべては、当館で所蔵する愛国百人一首かるたのうち、唯一札にイラストを用いている同社版より。

箱は左のように富士山と桜をあしらったシンプルなもので底には、奥付に相当するものがある。三島白水社の所在地は大阪市南区で、昭和18年3月30日発行、定価1円、印刷所は同西成区の難波精版印刷所、制作担当者として同西区の桑原章の名をあげている。

平成26年1月

奈良県立図書情報館